

第一幕

[元帥夫人の寢室。左のアルコーヴ（壁の一部をくぼませた小部屋）内には大きなテントの形をした天蓋付き寢台。寢台の脇には三つ折りの中国の屏風があり、その後に衣服が落ちている。少し離れて小さな机一脚と一組の椅子。左の小さなソファの上には剣が鞘に収められて置いてある。右には大きな観音開きの扉が控えの間に通じている。中央には、ほとんど見えないが、小さな扉が壁に埋め込まれている。その外に扉はない。アルコーヴと小さな扉の間の壁沿いに化粧台と一組のひじ掛け椅子が置かれている。寢台の幕は引き開けられている。半開きの窓から、明るい朝日が注ぎ込む。庭で小鳥が歌うのが聞える。（幕が開く。）オクタヴィアンは寢台の前のスツールの上に膝をついて元帥夫人を放さないでいる。元帥夫人は寢台に横たわり、軽く絡みついている。彼女の顔は見えず、ただそのとても美しい手と腕が見え、腕からはレースの袖が垂れている。]

オクタヴィアン

[熱狂的に]

あなたがどんなだったか！あなたがどんなか！一人として知らない、誰にも思いもつきもしないんだ！

元帥夫人

[枕の中に身を起こして]

文句がおあり？カンカン？皆が私がどんなか知っていた方がよろしくて？

オクタヴィアン

[情熱的に]

天使よ！まさか！天にも昇るほどうれしいんだ、あなたがどんなかを知っているのが僕だけだっ
てことが、誰も知らないんだよ！一人も知らないんだ。あなたを、あなたを、あなたを！この「あ
なた」ってなに？「あなたと僕」って？意味があるんだろうか？確かに言葉で、単なる言葉で
しょう？ねえ、そうでしょう！でも、その中には何かがあるんだ。目がくらむもの、引っぱるもの、
あこがれせき立てるもの、焦がし燃えるもの。僕の手が今あなたの手に重なるように、あなたがほ
しいこと、あなたにすがりつくこと、それが僕、それがあなたに望むこと、でもこの僕はこのあな
たの中に消えてしまう……僕はあなたの坊やだけど、僕が正気を失ってしまったら、あなたの坊
やはどこへ行ってしまうの？

元帥夫人

[静かに]

あなたは私の坊やよ、あなたは私の宝よ！

[深く愛情を込めて]

愛しているわ！

[抱擁]

オクタヴィアン

[突然怒りだす]

なぜ昼なんだ！昼なんてほしくない！昼なんてなんのためにあるんだ！そしたらあなたはみんなのものになってしまう！真っ暗になれ！

[窓に駆け寄って閉め、カーテンを引く。遠くからかすかに鈴の音が聞える。元帥夫人は優しく笑う。]

オクタヴィアン

僕のことを笑うの？

元帥夫人

[情愛を込めて]

あなたのことを笑う？

オクタヴィアン
天使よ！

元帥夫人
かわいい子、私の若くてかわいい子。
[再びかすかな鈴の音]
聞いて！

オクタヴィアン
いやだよ。

元帥夫人
静かに、聞いて！

オクタヴィアン
何にも聞きたくない！だいたい何が来るっていうの？
[鈴の音が近づく]
きっと手紙とかおべんちゃらを持ってきた伝令かな？ソーローとか、ハーティヒとか、ポルトガル大使とかからさ？ここには誰も入ってこさせないよ！ここでは僕が主人だ！

[中央の小扉が開き、銀の鈴をたくさんぶら下げた黄色の衣装をまとった子供の黒人が、チョコレートを載せた盆を捧げながらちょこちょこ敷居をまたぐ。扉は黒人の後で見えざる手により閉められる。]

元帥夫人
早く、隠れて！朝食だわ。

オクタヴィアン
[屏風の裏に滑り込む。]

元帥夫人
さっさと剣を寝台の後に片付けて！

オクタヴィアン
[急いで剣を取って隠す。]

元帥夫人
[天蓋の幕を引いて閉めてから、体をもとのように横たえる。]

黒人の子供
[小机の上に盆を置き、机を前方に押し、ソファをその隣にぐいと押し寄せると、小さな腕を胸の前で組んだ姿勢で寝台に向かって深くお辞儀をする。それから顔はいつも寝台に向けたまま後方に下がりながら、愛くるしく踊る。扉でもう一度お辞儀をして、姿を消す。]

元帥夫人
[寝台の幕の間から出てくる。毛皮の縁取りをした軽い上掛けを羽織っている。]

オクタヴィアン
[壁と屏風の間から出てくる。]

元帥夫人
間抜け、考えなし！ご婦人の寝室に剣をほっぽらかしておく人がありますか？もったきちんとした習慣を身に付けていないの？

オクタヴィアン

僕の振る舞いがご不快なら、僕がこういっただことに手慣れていないことがご不満なら、いったい僕のどんなところがお気に召すのかわかりません！

元帥夫人

[ソファの上で、情愛を込めて]

哲学しないで、恋人さま、そしてこっちへいらっしゃい。朝御飯を食べましょう。なにごともその時があるものよ。

オクタヴィアン

[彼女の隣に座る。親密に朝食をとる。オクタヴィアンが彼女の膝の上に頭を寝かせる。彼女は彼の髪をなでる。彼は彼女を見上げる。静かに]

マリー・テレーズ！

元帥夫人

オクタヴィアン！

オクタヴィアン

ビシェット（牝鹿ちゃん）！

元帥夫人

カンカン！

オクタヴィアン

僕の宝物！

元帥夫人

私の坊や！

[朝食を続ける]

オクタヴィアン

[楽しげに]

元帥はクロヴァシアの森にいて熊や山猫を狩っていて、そして僕は、僕はここにいて、若い僕は、何を狩っている？

[弾けるように]

僕は幸運だ、僕は幸運だよ！

元帥夫人

[影が顔をよぎる]

元帥のことはそっとしておきなさい！彼の夢を見たのよ。

オクタヴィアン

昨日の夜、彼の夢を見たの？昨日の夜？

元帥夫人

自分の夢には指図できないわ。

オクタヴィアン

昨日の夜、ご主人の夢を見たというの？昨日の夜？

元帥夫人

そんな目をしないで。どうすることもできないわ。彼が家に帰って来たのよ。

オクタヴィアン

[静かに]
元帥が？

元帥夫人

中庭に馬や人の物音がして、彼も中庭にいたの。驚いてすぐに目が覚めたわ。やだわ。見てちょうだい。私は本当に子供だわ。まだ中庭から音が聞えるの。頭の中で鳴っているのかしら。ひょっとしてあなたにも何か聞える？

オクタヴィアン

ええ、もちろん何か聞えるけれど、それがご主人なわけあるもんかい！彼がどこにいるのか、考えてごらんよ。ライツェンラントだよ。エッセクよりもまだ遠いところだよ。

元帥夫人

それは本当に充分遠いの？なら、きっとほかの音なんでしょう。それならいいわ。

オクタヴィアン

すごく不安そうな目をしているよ、テレーズ？

元帥夫人

知ってるでしょう、カンカン。遠くにいるかも知れないけれども、元帥はほんとうにとっても素早いよ。ある時、

[言いやめる]

オクタヴィアン

ある時なにがあったの？

元帥夫人

[気を取られ、耳をそばだてる]

オクタヴィアン

[嫉妬して]

ある時何があったの？ある時何があったの？ねえ、ねえ！ある時何があったの？

元帥夫人

もう、いい子にして、何もかも知る必要はないわ。

オクタヴィアン

そうやって僕をもてあそぶ！

[絶望してソファの上に身を投げる。]

僕は不幸な人だ。

元帥夫人

さあ、すねないで。大切なのは今よ。

[聞く]

あれは元帥よ。他所の人なら、控えの間の音でそれとわかるわ。絶対に主人よ、衣装部屋から入ってこようとして召使いと言い争うのなんて。カンカン、主人だわ。

オクタヴィアン

[剣を取りに走り、それから右に駆け寄る。]

元帥夫人

そっちはだめ。そっちは控えの間よ。そっちには出入りの業者や召使いがたくさんいるわ。あっちよ！

オクタヴィアン
〔小扉に向かって走る。〕

元帥夫人
遅すぎたわ！もう衣装部屋まで来てるわ。こうなったら最後の手段よ！隠れて！
〔一瞬、途方に暮れた後〕
そっちよ！

オクタヴィアン
来たら僕が飛びかかるよ！あなたの隣にいる！

元帥夫人
そっちの寝台の後よ！そっちの幕の中に！そして動かないで！

オクタヴィアン
〔ためらって〕
もし僕がそこで捕まったら、あなたはどうなるの、テレーズ？

元帥夫人
〔懇願しながら〕
隠れて、かわいい子！

オクタヴィアン
〔屏風の脇で〕
テレーズ！

元帥夫人
〔いらいらと足踏みをしながら〕
じっとしているのよ！
〔目をきらきらと輝かせながら〕
見てみたいの。私がここに立っている時に、あえてそっちに入っていくのかどうか。私はナポリの
将軍とは違うのよ。持ち場からは絶対に動かないわ。
〔きびきびと小さな扉の側まで行き、耳を傾ける。〕
私の召使いたちは勇敢だわ。彼をここにいれまいと、私は寝てると言っているわ。とっても勇敢だ
わ！
〔衣装部屋の物音は大きくなり続ける。耳をそばだてる〕

あの声！あれは元帥の声とはまったく違うわ！「男爵様」と言っているわ。他所の人だわ。

〔嬉しそうに〕
カンカン、あれはお客だわ。
〔笑う〕
急いで服を着るのよ。でも召使いたちに見つからないように、まだ隠れていてね。でも、あの嫌な
大声には聞き覚えがあるわ。誰だったかしら？大変、あれはオックスよ。親戚の、レルヒエナウの、
オックス・アウス・レルヒエナウだわ。いったい何の用かしら？イエス様マリア様！

〔つい笑い出す〕
カンカン、聞いている？カンカン、覚えていない？
〔左奥に数歩歩み寄る〕
5、6日前の手紙……馬車に乗っていて、車の扉のところまで手紙が届けられたことがあったじゃ
ない。あれがオックスからの手紙だったのよ。そして、私には何が書いてあったかさっぱり分ら
ないわ。
〔笑う〕
全部あなたのせいよ、カンカン！

執事の声

[外で話している]
廊下でお待ちください、閣下！

男爵の声
[外で]
いったいどこで礼儀を学んだのかね？レルヒェナウ男爵は控えの間で待たないよ。

元帥夫人
カンカン、何をしているの？どこに隠れているの？

オクタヴィアン
[女物のスカートと短い上着を着て、髪はハンカチとりボンをボンネットのようにして、出てきて、膝を折ってお辞儀をする]
ご用でござえますか、侯爵夫人さま。おらはまだお仕えに出て日が短えです。

元帥夫人
まあ、かわいい子！だけどあと一回しか接吻してあげられないわ。
[急いで接吻する。外で新たに音がする]
ドアをこじ開けるつもりだわ、あの御仁は、なんとか出て行ってね。召使いの間を大胆にすり抜けるのよ。ほんとうになんて賢いはずらっ子なのかしら！後でまたいらっしやいね。でも男の人の格好をして表の扉からいらしてね、できれば。

[元帥夫人は扉に背を向けて座り、チョコレートを飲み始める。オクタヴィアンは素早く小扉へ向い、反対側へ行こうとする。その瞬間、扉が勢いよく引き開けられ、オックス男爵、および家僕たちが空しくも彼を引きとどめようとしながら入ってくる。オクタヴィアンは頭を低くして機敏に逃げ出そうとするも、男爵とぶつかってしまい、当惑して扉の左側の壁沿いに体を押し付ける。三人の家僕が男爵と同時に入ってきて、なすすべなく立つ。]

男爵
[尊大に家僕たちへ向かって]
言うまでもなく閣下はお会いになる。
[進み出る。家僕はその左にいて道を遮ろうとする。オクタヴィアンに興味を持って]
失礼、かわいいお嬢さん。

オクタヴィアン
[当惑して壁に向かう]

男爵
[気取ってわざとらしく腰を低くして]
失礼、かわいいお嬢さん、と申したのですが。

元帥夫人
[肩越しに見て、立ち上がって男爵を出迎えに歩み寄る]

男爵
[オクタヴィアンに向かって慇懃に]
どこかおけがをさせませんでしたか？

家僕たち
[男爵を引っぱる。静かに]
侯爵夫人閣下！

男爵

[フランス風のお辞儀を二度繰り返す]

元帥夫人

とてもお元気そうですね、閣下。

男爵

[再びお辞儀する。家僕へ]

君もよくわかっただろう。閣下が私にお会いになって喜んでいらっしゃるのが。

[男爵は世慣れた軽妙さで元帥夫人に向いながら手を差し伸べ、彼女も手を見せる。]

それに閣下が喜ばれないわけがない！身分の高い者同士にとって早い時間など何の関係がありましょか？かつてはまことに毎日毎日、我がプリオッシュ侯爵夫人のもとに朝のご挨拶に伺ったものです。閣下はお風呂に入っておられて、私との間には小さな屏風しか隔てるものが無かったのですよ。驚かざるを得ませんよ。

[怒って見回しながら]

閣下の家僕ときたら...

オクタヴィアン

[壁沿いにアルコーヴへ向かって忍び寄り、できる限り寝台の影に身を隠そうとする。]

元帥夫人

お許してください。言われたとおりに振る舞っただけなのです。今朝は片頭痛がしまして。

[元帥夫人の合図で家僕たちは小さなソファとひじ掛け椅子一脚をより前に動かし、立ち去る。]

男爵

[たびたび背後を振り返る]

元帥夫人

[男爵にひじ掛け椅子に座るよう勧めてから、自らはソファに腰を下ろす。]

男爵

[座りかけるが、かわいい小間使いのことに気を取られている。独白]

なんてかわいいんだ！きれいないい子だ！

元帥夫人

[立ち上がり、儀礼的に改めて席を勧める]

男爵

[ためらいながら座り、かわいい小間使いに完全に背を向けないように苦心する。]

元帥夫人

まだ本調子じゃないんですの。御兄様にはどうかおわかりいただければと思いますわ。

男爵

もちろんです

[向きを変えてオクタヴィアンを見る]

元帥夫人

私の小間使いですの。田舎からきた若い子で、閣下にはご迷惑ではないかと心配ですわ。

男爵

本当にすてきだ！何ですって？とんでもない！まったく逆です！

[男爵はオクタヴィアンに手で合図し、それから元帥夫人に]

閣下も驚きになられたと存じます。私が新郎として

[見回す]

なんといいですか...

元帥夫人

新郎として？

男爵

ええ、閣下には当方からのお手紙で事細かに...

[独白]

新人だな。うまそうだ。十五にもならないだろう。

元帥夫人

[安心して]

手紙で、もちろん、ええ、手紙ですよ。お相手の幸運な方はどなたでしたっけ。ここまで名前が出かかっているんですよ。

男爵

何ですか？

[後方に]

とびきり若い！ぴちぴち！洗い立て！素晴らしい！

元帥夫人

ええっと、花嫁はどなた？

男爵

ファニナル嬢です。

[かるく不満そうに]

閣下には名前もお伝えしたはずですが。

元帥夫人

もちろんですとも！私の頭がどうかしていますわ。ただ御一門はこちらの方でいらして？

オクタヴィアン

[忙しげに盆を取り上げ、男爵のひときわ背後に入ろうとする。]

男爵

[強調して]

当然です、閣下、こちらのものです。陛下の恩寵によって貴族に列せられたものです。軍に納入しております、ニーダーラントにあります軍に。

元帥夫人

[もどかしげに、オクタヴィアンに下がるように目で合図する。]

男爵

[元帥夫人の表情をまったく取り違える]

閣下がこの不釣り合いな結婚にお美しい額をしかめられるのもわかります。しかし、これはもう確かに、この女の子が天使のようにかわいいんですな。修道院から出たてでして。一人っ子でして

[語気を強めて]

この男はヴィーデンに家を十二軒と、ホーフ（宮殿地区）に館をもっておまして、そして健康状態が

[ほくそ笑みながら]

あまりよろしくないんですな。

元帥夫人

親愛なる御兄様、よくわかりましたわ。とてもよいお話だということが
[オクタヴィアンに下がるように合図する。]

男爵

そして閣下の面前で恐縮ですが、私自身は彼ら二人に充分なだけの高貴な血をこの体の中に持っている
と自負しておりますし、まあ、人は結局変わることはできませんからな、コルポディバッコ
(なんたること)！奥様に身分相応の優先権はいずれ手に入れてやることができますし、子供たち
に関しては、もし彼らに金の鍵が譲渡されないようなことになっても、ヴァベーネ(問題ない)！
ヴィーデンの十二軒の家の十二本の鉄の鍵を頼みにすることができますからな。

元帥夫人

そうでしょうとも！まあ、もちろん、御兄様の子供たちがドンキホーテになることなどありませ
んでしょ。

オクタヴィアン

[盆を持って扉の方に下がろうとする。]

男爵

なぜショコラーデを下げるのです！どうか、どうか！そこに！ツツツ、いったいなんで！

オクタヴィアン

[ためらって止まり、顔をそらす。]

元帥夫人

お行き、いいから！

男爵

実を申しますと、閣下、私はほとんど何も食べておらんのですよ。

元帥夫人

[あきらめて]

マリアンデル、こちらへいらっしゃい。閣下にお給仕しなさい。

オクタヴィアン

[来て給仕。]

男爵

[カップを取り、飲む。]

ほとんど何も食べておらんのですよ、閣下。旅行用馬車に朝の五時から乗ってまして、(ちょうど
ぴったりだな！

[オクタヴィアンへ]

ここにいなさいね、お嬢ちゃん。お話したいことがあるからね。)

[元帥夫人へ、大きな声で]

従者たち全員、馬丁、狩人たち、みんな

[むさぼり食う]

みんな下の中庭でうちの司祭とおります。

元帥夫人

[オクタヴィアンへ]

行きなさい。

男爵

[オクタヴィアンへ]

ビスケットをもう一ついただけるかな。ここにいなさいな。

[静かに]

(ほんとにかわいい天使だな。お宝だ、べっぴんだ。)

[元帥夫人へ]

...「白馬」へ行く途中でして、そちらへ宿泊いたしますが、それは明後日まででして.....

[声をひそめてオクタヴィアンへ]

(なんかきれいなものをあげるからね、おまえさんと...)

[元帥夫人へ、極めて大声で]

明後日まででして...

[急いでオクタヴィアンへ]

(二人っきりで仲良くしよう！どうだい？)

元帥夫人

[オクタヴィアンの喜劇的な仕草に笑いをこらえきれない。]

男爵

[元帥夫人へ]

それからファニナルの館に移ります。当然ながら、その前に新郎の代理人を...

[憤激した様子でオクタヴィアンへ]

いいから待たんかね？...生まれ高貴なる新婦殿へ派遣し、銀の薔薇を届けねばなりません、貴族の故実に従いましてな。

元帥夫人

それで閣下は、親族のうちからどなたをこの名誉ある立場にお選びに？

男爵

それについて閣下の御助言をいただきたいという一心で、このように失礼ながら旅行服にて本日の朝のお目通りに...

元帥夫人

私に？

男爵

書簡にて恭順の意を尽くしてお願いしましたとおりでございます。このようなへりくだりましての請願がご機嫌を損ねたというほど私が不運であろうことはまさか...

[背を後ろにもたせかけ、オクタヴィアンへ]

僕が君のほしいものをあげよう。君にはその価値がある！

元帥夫人

まさか、とんでもない！閣下の新郎としての最初のご訪問の代理人を親族から... 誰がいいかしら？プライシंक兄様？どう？ランベール兄様？私が...

男爵

閣下のお美しいお手にお任せいたします。

元帥夫人

わかりました。お夕食をご一緒にいかが、御兄様？明日はどうかしら？その時にご推薦いたしましょう。

男爵

まことに恐れ入ります。

元帥夫人

[立ち上がろうとして]

ですが

男爵

[ひそめた声でオクタヴィアンへ]
もどってらっしゃい！それまでいなくなるからな！

元帥夫人

[独白]

まあ！

[大きな声で]

そこにおいでなさい！他になにか御兄様のお役にたてますかしら？

男爵

まことに恐縮ではありますが、閣下の公証人にご紹介いただければありがたく存じます。夫婦財産契約に関することなのですが、

元帥夫人

私の公証人はわりと頻繁に朝に参りますのよ。マリアンデル、控えの間で待っているかどうか見てください。

男爵

なぜ小間使いを？閣下のお世話が私のために行き届かなくなるではありませんか。

[彼女を引き止める]

元帥夫人

御兄様、おとなしく行かせておあげなさい。

男爵

[生き生きと]

そうはいきません。あなたは閣下のお申し付けを伺えるようここにいなさい。すぐに家僕のだれかがやってくるでしょう。[揺れながら]

こんなかわいいちゃんを、まったく、あんな下劣な家僕連中の中に送るなんて

[彼女をなでる]

元帥夫人

お氣使いが過ぎますわ。

執事

[入ってくる]

男爵

ほら、言ったじゃないですか。彼が閣下にご報告しますよ。

元帥夫人

[執事へ]

シュトゥルーハン、私の公証人は次の間に控えているかしら？

執事

侯爵夫人閣下におかれましては、公証人、それから管理人、それから料理長、それから、シルヴィア様が送られました歌手とフルート奏者が控えております。

[冷たく]

その他にいつものろくでもない連中がおります。

ERSTER AUFZUG

Das Schlafzimmer der Feldmarschallin. Links im Alkoven das grosse zeltförmige Himmelbett. Neben dem Bett ein dreiteiliger chinesischer Wandschirm hinter dem Kleider liegen. Ferner ein kleines Tischchen und ein paar Sitzmöbel. Auf einem kleinen Sofa links liegt ein Degen in der Scheide. Rechts grosse Flügel in das Vorzimmer. In der Mitte, kaum sichtbar, kleine Türe in die Wand eingelassen. Sonst keine Türen. Zwischen dem Alkoven und der kleinen Türe steht ein Frisiertisch und ein paar Armsessel an der Wand. Die Vorhänge des Bettes sind zurückschlagen. Durch das halb geöffnete Fenster strömt die helle Morgensonne herein. Man hört im Garten die Vögel singen. (Vorhang

auf.) Octavian kniet auf einem Schemel vor dem Bett und hält die Feldmarschallin, die im Bett liegt, halb umschlungen. Man sieht ihr Gesicht nicht, sondern nur ihre sehr schöne Hand und den Arm, von dem das Spitzenhemd abfällt.

OCTAVIAN

schwermächtig

Wie du warst! Wie du bist! Das weiß niemand, das ahnt keiner!

MARSCHALLIN

richtet sich in den Kissen auf

Beklagt Er sich über das, Quinquin? Möchte Er, dass viele das wüssten?

OCTAVIAN

feurig

Engel! Nein! Selig bin ich, dass ich der Einzige bin, der weiß, wie du bist! Keiner ahnt es! Niemand weiß es. Du, Du, Du! - Was heisst das „Du“? Was „Du und ich“? Hat denn das einen Sinn? Das sind Worte, blosse Worte, nicht? Du sag! Aber dennoch: Es ist etwas in ihnen, ein Schwindeln, ein Ziehen, ein Sehnen und Drängen, ein Schmachten und Brennen: Wie jetzt meine Hand zu deiner Hand kommt, das Zu-dir-wollen, das Dich umklammern, das bin ich, das will zu dir, aber das Ich vergeht in dem Du.... Ich bin dein Bub, aber wenn mir dann Hören und Sehen vergeht - wo ist dann dein Bub?

MARSCHALLIN

leise

Du bist mein Bub, du bist mein Schatz!

sehr innig

Ich hab' dich lieb!

Umarmung

OCTAVIAN

fährt auf

Warum ist Tag? Ich will nicht den Tag! Für was ist der Tag! Da haben dich alle! Finster soll sein!

*Er stürzt ans Fenster, schliesst es und zieht die Vorhänge zu. Man hört von fern ein leises Klingeln.
Die Marschallin lacht leise*

OCTAVIAN

Lachst du mich aus?

MARSCHALLIN

zärtlich

Lach' ich dich aus?

OCTAVIAN

Engel!

MARSCHALLIN

Schatz du, mein junger Schatz.

wieder ein feines Klingeln

Horch!

OCTAVIAN

Ich will nicht.

MARSCHALLIN

Still, pass' auf!

OCTAVIAN

Ich will nichts hören! Was wird 's denn sein?

das Klingeln näher

Sind 's leicht Laufer mit Briefen und Komplimenten? Vom Saurau, vom Hartig, vom portugieser Envoy Ø? Hier kommt mir keiner herein! Hier bin ich der Herr!

Die kleine Tür in der Mitte geht auf und ein kleiner Neger in Gelb, behängt mit silbernen Schellen, ein Präsensbrett mit der Chokolade tragend, tritt über die Schwelle. Die Tür hinter dem Neger wird von unsichtbaren Händen geschlossen.

MARSCHALLIN

Schnell, da versteck Er sich! Das Fröhlichkeit ist 's.

OCTAVIAN

gleitet hinter den Schirm

MARSCHALLIN

Schmeiß ' Er doch den Degen hinters Bett.

OCTAVIAN

fährt nach dem Degen und versteckt ihn

MARSCHALLIN

legt sich zur Ück, nachdem sie die Vorhänge zugezogen hat.

DER KLEINE NEGER

stellt das Servierbrett auf das kleine Tischchen, schiebt dieses nach vorne, rückt das Sofa hinzu, verneigt sich dann tief gegen das Bett, die kleinen Arme über die Brust gekreuzt. Dann tanzt er zierlich nach rechts, immer das Gesicht dem Bette zugewandt. An der Tür verneigt er sich nochmals und verschwindet.

MARSCHALLIN

tritt zwischen den Bettvorhängen hervor. Sie hat einen leichten, mit Pelz verbrämten Mantel umgeschlagen.

OCTAVIAN

kommt zwischen der Mauer und dem Wandschirm heraus.

MARSCHALLIN

Er Katzenkopf, Er Unvorsichtiger! Lässt man in einer Dame Schlafzimmer seinen Degen herumliegen? Hat Er keine besseren Gepflogenheiten?

OCTAVIAN

Wenn Ihr zu dumm ist, wie ich mich benehme ' und wenn Ihr abgeht, dass ich kein Geübter in solchen Sachen bin, dann weiß ich überhaupt nicht, was Sie an mir hat!

MARSCHALLIN

zärtlich auf dem Sofa

Philosophir Er nicht, Herr Schatz, und komm ' Er her. Jetzt wird gefröhlicht. Jedes Ding hat seine Zeit.

OCTAVIAN

setzt sich dicht neben sie. Sie fröhlicht sehr zärtlich. Octavian legt sein Gesicht auf ihr Knie. Sie streichelt sein Haar. Er blickt zu ihr auf. leise

Marie Theres ' !

MARSCHALLIN

Octavian!

OCTAVIAN
Bichette!

MARSCHALLIN
Quinquin!

OCTAVIAN
Mein Schatz!

MARSCHALLIN
Mein Bub!
Sie fr ü hst ü cken weiter

OCTAVIAN
lustig
Der Feldmarschall sitzt im krovatischen Wald und jagt auf B ä ren und Luchsen und ich, ich sitz hier, ich junges Blut, und jag ' auf was?
ausbrechend
Ich hab ' ein Gl ü ck, ich hab ' ein Gl ü ck!

MARSCHALLIN
indem ein Schatten ü ber ihr Gesicht fliegt
Lass Er den Feldmarschall in Ruh! Mir hat von ihm getr ä umt.

OCTAVIAN
Heut ' nacht hat dir von ihm getr ä umt? Heut ' nacht?

MARSCHALLIN
Ich schaff ' mir meine Tr ä ume nicht an.

OCTAVIAN
Heute nacht hat dir von deinem Mann getr ä umt? Heute nacht?

MARSCHALLIN
Mach ' Er nicht solche Augen. Ich kann nichts daf ü r. Er war einmal wieder zu Haus.

OCTAVIAN
leise
Der Feldmarschall?

MARSCHALLIN
Es war ein L ä rm im Hof von Pferd und Leut, und Er war da. Vor Schreck war ich auf einmal wach. Nein, schau nur, schau nur, wie ich kindisch bin, ich h ö r ' noch immer den Rumor im Hof. Ich bring ' s nicht aus dem Ohr. H ö rst du leicht auch was?

OCTAVIAN
Ja freilich h ö r ' ich was, aber muss es denn dein Mann sein! Denk ' dir doch, wo der ist: im Raitzenland, noch hinterw ä rts von Esseg.

MARSCHALLIN
Ist das sicher sehr weit? Na dann wird ' s halt was anders sein. Dann is ja gut.

OCTAVIAN
Du schaust so ä ngstlich drein, Theres?

MARSCHALLIN

Wei ß Er, Quinquin, wenn es auch weit ist - der Feldmarschall ist halt sehr geschwind. Einmal
sie stockt

OCTAVIAN
Was war einmal?

MARSCHALLIN
zerstreut, horcht

OCTAVIAN
eifers üchtig
Was war einmal? Was war einmal? Bichette, Bichette! Was war einmal?

MARSCHALLIN
Ach sei Er gut. Er muss nicht alles wissen.

OCTAVIAN
So spielt sie sich mit mir!
wirft sich verzweifelt aufs Sofa
Ich bin ein ungl ü cklicher Mensch!

MARSCHALLIN
Jetzt trotz ' Er nicht. Jetzt gilt ' s.
horcht
Es ist der Feldmarschall. Wenn es ein Fremder w ä r ' , so w ä r ' der L ä rm da draussen in meinem
Vorzimmer. Es muss mein Mann sein, der durch die Garderob ' herein will und mit den Lakaien
disputiert. Quinquin, es ist mein Mann!

OCTAVIAN
f ä hrt nach seinem Degen und l ä uft gegen rechts.

MARSCHALLIN
Nicht dort, dort ist das Vorzimmer. Da sitzen meine Lieferanten und ein halbes Dutzend Lakaien. Da!

OCTAVIAN
l ä uft hin ü ber zur kleinen T ü re.

MARSCHALLIN
Zu sp ä t! Sie sind schon in der Garderob ' ! Jetzt bleibt nur eins! Versteck Er sich!
nach einer kurzen Pause der Ratlosigkeit
Dort!

OCTAVIAN
Ich spring ' ihm in den Weg! Ich bleib ' bei dir!

MARSCHALLIN
Dort hinters Bett! Dort in die Vorh ä ng ' ! Und r ü hr ' dich nicht!

OCTAVIAN
z ö gernd
Wenn er mich dort erwischt, was wird aus dir, Theres?

MARSCHALLIN
flehend
Versteck Er sich, mein Schatz!

OCTAVIAN

beim Wandschirm
Theres!

MARSCHALLIN

ungeduldig aufstampfend

Sei Er ganz still!

mit blitzenden Augen

Das möcht' ich seh'n, ob einer sich dort hin über traut, wenn ich hier steh'. Ich bin kein napolitanischer General: Wo ich steh', steh' ich.

Sie geht energisch gegen die kleine Tür los und horcht.

Sind brave Kerl'n, meine Lakaien. Wollen ihn nicht herein lassen, sagen, dass ich schlaf'. Sehr brave Kerl'n!

Der Lärm in der Garderobe wird immer grösser. aufhorchend

Die Stimm'! Das ist ja gar nicht die Stimm' vom Feldmarschall! Sie sagen „Herr Baron“ zu ihm. Das ist ein Fremder.

lustig

Quinquin, es ist ein Besuch.

Sie lacht

Fahr' Er schnell in seine Kleider, aber bleib' Er versteckt, dass die Lakaien ihn nicht seh'n. Die blonde grosse Stimm' müsste ich doch kennen. Wer ist denn das? Herrgott, das ist ja der Ochs, das ist mein Vetter, der Lerchenau, der Ochs aus Lerchenau. Was will denn der? Jesus Maria!

sie muss lachen

Quinquin, hört Er? Quinquin, erinnert Er sich nicht?

Sie geht ein paar Schritte nach links hin über

Vor fünf oder sechs Tagen den Brief -- Wir sind im Wagen gesessen, und einen Brief haben sie mir an den Wagenschlag gebracht. Das war der Brief vom Ochs. Und ich hab' keine Ahnung, was drin gestanden ist.

lacht

Daran ist Er allein schuldig, Quinquin!

STIMME DES HAUSHOFMEISTERS

draussen gesprochen

Belieben Euer Gnaden in der Galerie zu warten!

STIMME DES BARONS

draussen

Wo hat Er Seine Manieren gelernt? Der Baron Lerchenau antichambriert nicht.

MARSCHALLIN

Quinquin, was treibt Er denn? Wo steckt Er denn?

OCTAVIAN

in einem Frauenrock und Jackchen, das Haar mit einem Schnupftuch und einem Bande wie in einem Häubchen, tritt hervor und knickt

Befehl'n fürstli' Gnad'n, i bin halt noch nit recht lang in fürstli'n Dienst.

MARSCHALLIN

Du, Schatz! Und nicht einmal mehr als ein Busserl kann ich dir geben.

Küss ihn schnell. Neuer Lärm draussen.

Er bricht mir ja die Tür ein, der Herr Vetter. Mach Er, dass Er hinaus komm'. Schließ' Er frech durch die Lakaien durch. Er ist ein blitzgescheidter Lump! Und komm' Er wieder, Schatz. Aber in Manns-kleidern und durch die vordre Tür, wenn's Ihm beliebt.

Setzt sich mit dem Rücken gegen die Tür und beginnt ihre Schokolade zu trinken. Octavian geht schnell gegen die kleine Tür und will hinaus. Im gleichen Augenblick wird die Tür aufgerissen, und Baron Ochs, den die Lakaien vergeblich abzuhalten suchen, tritt ein. Octavian, der mit gesenktem Kopf rasch entwischen wollte, stößt mit ihm zusammen. Dann drückt er sich verlegen an die Wand links von der Tür

ü r. Drei Lakaien sind gleichzeitig mit dem Baron eingetreten, stehen ratlos.

BARON

mit Grandezza zu den Lakaien

Selbstverst ä ndlich emp f ä ngt mich Ihro Gnaden.

Er geht nach vorne, die Lakaien zu seiner Linken suchen ihm den Weg zu vertreten. Zu Octavian mit Interesse

Pardon, mein h ü bsches Kind!

OCTAVIAN

dreht sich verlegen gegen die Wand

BARON

mit Grazie und Herablassung

Ich sag ' : Pardon, mein h ü bsches Kind.

MARSCHALLIN

sieht ü ber die Schulter, steht dann auf und kommt dem Baron entgegen

BARON

galant zu Octavian

Ich hab ' Ihr doch nicht ernstlich wehgetan?

LAKAIEN

zupfen den Baron, leise

Ihre f ü rstlichen Gnaden!

BARON

macht die franz ö sische Reverenz mit zwei Wiederholungen

MARSCHALLIN

Euer Liebden sehen vortrefflich aus.

BARON

verneigt sich nochmals, dann zu den Lakaien

Sieht Er jetzt wohl, dass Ihre Gnaden entz ü ckt ist, mich zu sehn.

Auf die Marschallin zu, mit weltm ä nnischer Leichtigkeit, indem er ihr die Hand reicht und sie vorf ü hrt.

Und wie sollten Euer Gnaden nicht! Was tut die fr ü he Stunde unter Personen von Stand? Hab ' ich nicht seinerzeit wahrhaftig Tag f ü r Tag unsrer F ü rstin Brioche meine Aufwartung gemacht, da sie im Bad gesessen ist, mit nichts als einem kleinen Wandschirm zwischen ihr und mir. Ich muss mich wundern,
zornig umschauend

wenn Euer Gnaden Livree -

OCTAVIAN

ist an der Wand gegen den Alkoven hin geschlichen, macht sich m ö glichst unsichtbar beim Bett zu schaffen.

MARSCHALLIN

Verzeihen Sie, man hat sich betragen, wie es befohlen. Ich hatte diesen Morgen die Migr ä ne.

Auf einen Wink der Marschallin haben die Lakaien ein kleines Sofa und einen Armstuhl mehr nach vorn gebracht und sind abgegangen.

BARON

sieht ö fters nach r ü ckw ä rts

MARSCHALLIN

setzt sich auf das Sofa, nachdem sie dem Baron den Platz auf dem Armstuhl angeboten hat

BARON

*versucht sich zu setzen, äusserst okkupiert von der Anwesenheit der hübschen Kammerzofe. Für sich.
Ein hübsches Ding! Ein gutes saubres Kinder!*

MARSCHALLIN

aufstehend, ihm zeremoniös aufs neue seinen Platz anbietend.

BARON

setzt sich zögernd und bemerkt sich der hübschen Zofe nicht völlig den Rücken zu kehren.

MARSCHALLIN

Ich bin auch jetzt noch nicht ganz wohl. Der Herr Vetter wird darum vielleicht die Gnade haben.

BARON

Natürlich.

Er dreht sich um, um Octavian zu sehen

MARSCHALLIN

Meine Kammerzofe, ein junges Ding vom Lande. Ich muss fürchten, sie inkommodiert Euer Liebden.

BARON

Ganz allerliebste! Wie? Nicht im Geringsten! Mich? Im Gegenteil!

Baron winkt Octavian mit der Hand, dann zur Marschallin

Euer Gnaden werden vielleicht verwundert sein, dass ich als Bräutigam -
sieht sich um

in des - inzwischen -

MARSCHALLIN

Als Bräutigam?

BARON

Ja, wie Euer Gnaden denn doch aus meinem Brief genugsam -
für sich

ein Grasaff, appetitlich, keine fünfzehn Jahr!

MARSCHALLIN

erleichtert

Der Brief, natürlich, ja, der Brief, wer ist denn nur die Glückliche? Ich hab' den Namen auf der Zunge.

BARON

Wie?

nach rückwärts

Pudeljung! Gesund! Gewaschen! Allerliebste!

MARSCHALLIN

Wer ist nur schnell die Braut?

BARON

Das Fräulein Faninal.

mit leisem Unmut

Habe Euer Gnaden den Namen nicht verheimlicht.

MARSCHALLIN

Natürlich! Wo hab' ich meinen Kopf?! Bloss die Familie. Sind's keine Hiesigen?

OCTAVIAN

macht sich mit dem Servierbrett zu tun, wodurch er mehr hinter den Rücken des Barons kommt.

BARON

mit Nachdruck

Jawohl, Euer Gnaden, es sind Hiesige. Ein durch die Gnade Ihrer Majestät Geadelter. Er hat die Lieferung für die Armee, die in den Niederlanden steht.

MARSCHALLIN

bedeutet Octavian ungeduldig mit den Augen, er soll sich fortmachen.

BARON

missversteht der Marschallin Miene vollständig

Ich seh, Euer Gnaden runzeln Dero schöne Stirn ob der Mesalliance. Allein, dass ich es sage, das Mädchen ist für einen Engel hübsch genug. Kommt frischwegs aus dem Kloster. Ist das einzige Kind, starker

dem Mann gehören zwölf Häuser auf der Wied'n, nebst dem Palais am Hof und seine Gesundheit schmunzelnd soll nicht die beste sein.

MARSCHALLIN

Mein lieber Vetter, ich kapier' schon, wieviel's geschlagen hat.

Sie winkt Octavian, den Rückzug zu nehmen.

BARON

Und mit Verlaub fürstliche Gnaden, ich dünke mir gut's adeliges Blut genug im Leib zu haben für ihre Zwei, man bleibt doch schliesslich, was man ist, corpo di bacco! Den Vortritt, wo er ihr gebührt, wird man der Frau Gemahlin noch zu verschaffen wissen und was die Kinder anlangt, wenn sie denen den goldenen Schlüssel nicht koncedieren werden - Va bene! Sie werden sich mit den zwölf eisernen Schlüsseln zu den zwölf Häusern auf der Wied'n zu getrost wissen.

MARSCHALLIN

Gewiss! O sicherlich, dem Vetter seine Kinder, die werden keine Don Quichotten.

OCTAVIAN

will mit dem Servierbrett rückwärts zur Tür hin.

BARON

Warum hinaus die Schokolade! Geruhen nur! Da! Pst, pst, wieso denn!

OCTAVIAN

steht ungeschlüssig, das Gesicht abgewendet.

MARSCHALLIN

Fort, geh'sie nur!

BARON

Wenn ich Euer Gnaden gestehe, dass ich so gut wie nicht bin.

MARSCHALLIN

resigniert

Mariandel, komm sie her. Servier sie Seiner Liebden.

OCTAVIAN

kommt, serviert

BARON

Baron nimmt eine Tasse, bedient sich.

So gut wie n ü chtern, Euer Gnaden. Sitz ' im Reisewagen seit f ü nf Uhr Fr ü h, (recht ein gestelltes Ding!

zu Octavian

Bleib ' Sie hier, mein Herz. Ich hab ' Ihr was zu sagen.)

zur Marschallin, laut

Meine ganze Livree, Stallpagen, J ä ger, alles -

Er frisst

Alles unten im Hof zusammt meinem Almosenier.

MARSCHALLIN

zu Octavian

Geh ' Sie nur.

BARON

zu Octavian

Hat Sie noch ein Biscoterl? Bleib ' Sie doch.

leise

(Sie ist ein s ü sser Engel, Schatz, ein sauberer.)

zur Marschallin

... sind auf dem Wege zum „ wei ß en Rosse “ , wo wir logieren, heisst bis ü bermorgen -

halblaut zu Octavian

(Ich g ä b ' was sch ö nes drum, mit Ihr -)

zur Marschallin, sehr laut

bis ü bermorgen -

schnell zu Octavian

(unter vier Augen zu scharmutzieren! Wie?)

MARSCHALLIN

muss lachen ü ber Octavians freches Kom ö dienspiel.

BARON

zur Marschallin

Dann ziehen wir ins Palais von Faninal. Nat ü rlich muss ich vorher den Br ä utigamsauff ü hrer -

w ü tend zu Octavian

will Sie denn nicht warten? - an die wohlgeborne Jungfer Braut deputieren, der die Silberrose ü berbringt nach der hochadeligen Gepflogenheit.

MARSCHALLIN

Und wen von der Verwandtschaft haben Euer Liebden f ü r dieses Ehrenamt ausersehn?

BARON

Die Begierde, dar ü ber Euer Gnaden Ratschlag einzuholen, hat mich so k ü hn gemacht, in Reisekleidern bei dero heutigem Lever -

MARSCHALLIN

Von mir?

BARON

Gem ä ss brieflich in aller Devotion getaner Bitte. Ich bin doch nicht so ungl ü cklich, mit dieser devotesten Supplik Dero Missfallen ...

lehnt sich zur ü ck, zu Octavian

Sie k ö nnte aus mir machen, was Sie wollte. Sie hat das Zeug dazu!

MARSCHALLIN

Wie denn, nat ü rlich! Einen Auff ü hrer f ü r Euer Liebden ersten Br ä utigamsbesuch aus der Verwandtschaft - wen denn nur? Den Vetter Preysing? Wie? Den Vetter Lambert? Ich werde -

BARON

Dies liegt in Euer Gnaden allersch ö nsten H ä nden.

MARSCHALLIN

Ganz gut. Will Er mit mir zu Abend essen, Vetter? Sagen wir morgen, will Er? Dann proponier ' ich Ihm einen.

BARON

Euer Gnaden sind die Herablassung selber.

MARSCHALLIN

will aufstehen

Indes

BARON

halblaut zu Octavian

Dass Sie mir wiederkommt! Ich geh ' nicht eher fort!

MARSCHALLIN

f ü r sich

Oho!

laut

Bleib ' Sie nur da! Kann ich dem Vetter f ü r jetzt noch dienlich sein?

BARON

Ich sch ä me mich bereits: An Euer Gnaden Notari eine Rekommandation. w ä re mir lieb. Es handelt sich um den Eh ' vertrag.

MARSCHALLIN

Mein Notari kommt ö fter des Morgens. Schau Sie doch, Mariandel, ob er nicht in der Antichambre ist und wartet.

BARON

Wozu das Kammerzofel? Euer Gnaden beraubt sich der Bedienung um meinetwillen.

h ä lt sie auf

MARSCHALLIN

Lass Er doch, Vetter, sie mag ruhig geh ' n.

BARON

lebhaft

Das geb ' ich nicht zu. Bleib ' Sie hier zu Ihrer Gnaden Wink. Es kommt gleich wer von der Livree herein.

wiegend

Ich liess ein solches Goldkind, meiner Seel ' , nicht unter das infame Lakaienvolk.

streichelt sie

MARSCHALLIN

Euer Liebden sind allzu besorgt.

HAUSHOFMEISTER

tritt ein

BARON

Da, hab ' ich ' s nicht gesagt? Er wird Euer Gnaden zu melden haben.

MARSCHALLIN

zum Haushofmeister

Struhan, hab ' ich meinen Notari in der Vorkammer warten?

HAUSHOFMEISTER

F ü rstliche Gnaden haben den Notari, dann den Verwalter, dann den Kuchelchef, dann, von Excellenz Silva hergeschickt, ein S ä nger mit einem Fl ö tisten.

trocken

Ansonsten das gew ö hnliche Bagagi.



この日本語テキストは、
クリエイティブ・コモンズ・ライセンス
の下でライセンスされています。
@ [mmnakai](#)

[Strauss, Richard / Der Rosenkavalier / I-2](#)